

歌集

旅程

歌集 旅程



昭和五十二年十二月一日

歌集 旅程

著者 宮野 磯 一

上尾市緑丘五〇一三

装幀 和 泉 俊 夫

印刷所 望月印刷所

大宮市桜木町四一四四

非売品

目次

序 河口一紀

漁火……………四

木曾路……………三

古里……………三

鎌倉……………四

伊豆路……………六

道北……………六

野田……………三

麦秋……………三

伽羅		二
さみだれ		三
早春		六
月山		四〇
蛾		四三
長女誕生		四四
転勤		四六
江差・松前		四八
宅地入手		五三
職場		五五
秋立つ		五五
ひたちの旅		五七

連休	三
長崎	六
庭草	三
室戸岬	五
久慈	六
コスモス	九
学園	七
稲群	四
海と子と	七
藤	九
能取岬	八
銀座の夜	三

春雷		五
湯田中		六
山陰路		九
鏡		四
不安		六
暮坂峠		九
みちのくから越後へ		一〇
同窓会		一四
上尾		一六
北陸路		一九
麻雀		二一
花火		二四

仕事	二六
妙高高原	二三
テニス	二四
栗の花	二六
沖縄	二四
道	二七
クラス会	二九
美ヶ原高原	二四
越後路	二七
あとがき	二五

序

宮野磯一氏が歌集を出されると言う。「旅程」と題する歌集の原稿のコピーを受取ったのは新橋の夜の酒場である。多分、三月か四月初め頃のどんより曇った暖かな宵だった。宮野氏と差し向かいで酒を酌むのは、その時が二度目であるが、縁とは不思議なもので、私は妙に懐しい気持で彼に對していた。「まゆみ」をなかだちにして知り合った短歌同行の士の親愛感が彼との間に漂っている。

序文の需めを受けながら、私は不図、さびしい気持になっていた。亡き高橋俊人先生の事が思い浮かぶのだった。先生が生きていられたなら、先生は喜んで序文を草されるに違いない。高橋先生本来の弟子、宮野さんには、それが何よりの事であり今更に先生の亡きことが悔やまれ、寂しまれる。

共通の歌の師を失った私達の間で交流の密度が高まるのはむべなることである。親を亡くした子供達が急速にこころ寄せ合うのに似ている。私は宮野さんのこの度の歌集「旅程」の上梓に非力だが同門の一人として力を尽くしたい。序文を借りて彼の作品の解題の一役を荷っていきたい。そして「旅程」が一人でも多くのひとに読まれることを希って止まない。

借用した歌集の原稿を私は行き帰りの通勤電車のなかで読んだ。序文を書く責任という事もあるが、こういう機会に「まゆみ」社の古い歌友の一人の作品を丹念に読み返す事は、作者並びにその作品の認識を深める上で役立つ。総合的に言えば、「旅程」は、面白く一気に読了出来た。青年期からの長い間の個々の作品の集積、展開の間から宮野礒一の生活の断面、人間像を浮かび出させる。歌集「旅程」には生真面目で、夢多く傷つき易い孤独な人間の相貌が刻まれている。

逃るべき小舟もあらず山陰の入江は暗くみぞれ激しき

放浪者の瞳にも似てかもめどり厳しき冬の浜に来て泣く

さいはての厚岸の町におりたちてマーケットに寄り酒などを買う

言葉多きに悲しくなれり少なければ少なくともし独りになれば

酒のめば陽気になりてうたうなり一人になりてこの物陰に

宮野さんの経歴に就いては詳しくは知らない。新橋で会った夜、彼から貰った名刺の肩書には国鉄工場の技術関係の管理者の地位が記入されていた。聞くところによると彼は若い頃から国鉄に入りさまざまな職場を勤務してきた由である。

能率を上げむとすれば親ほどの人にも厳しく言わねばならず

命ずるとは厳しきことよ人は皆己が意志を強く持ち居り

旅のうた一首生徒に語らいて午後の授業の力学始めぬ

生徒らに深く触れんと日々あれど吾の届かぬ若き位置あり

咲きそめしみやまつつじは岩に映ゆ妙義の山に生徒らと見る

生涯をこれこそと思うもの持てと説きつつ吾は淋しかりけり

これ等の作品のなかには断片的であるが作者の職場生活の様子がうかがわれる。ひとの上に立つ管理者としての悩み、亦ある時期には企業内の教師だった日の姿が詠われている。

宮野さんの抄出歌にも伺われるように生活者として、一個の生身の人間としての苦しみや哀歓をあるがままに詠っている作品に触れる事が多い。

あの外に採り得べき道なかりしかと激しく悔いぬ一日終りて

とくどくに吾が人生の過ぎ行けと時にはかなしく想うことあり

かく生きる、ラジオ放送の友の声ああ吾れ三十を過ぎ何にをかなせる

神よ仏よ吾が生く先きはいかならむ保険に入りて今日を安らぐ

日覚むれば吾が傍らに妻子あり木の香漂よう家にありけり

わづかなる借家の土地の片隅みにかためて植えしニラの葉育つ

組合の意向無視して何に一つ進まぬ業務に焦ら立つたべ

崩れゆく日本を救う道いかに吾が国鉄を救うはいかに

働かねば生きてはゆけぬものなりき職神聖と誰れか言いしが

私が「旅程」を一気に面白く読了出来たのは、作者の生活者としての真摯な心情に共感出来たからに他ならない。

感傷こそそうたい続くる源ぞ人こそ笑へ吾がいのちなり

宮野さんの作品は、この一首に見られる詩に対する考え方、美学が淵源をなし、出発点となっている。詠われているようにたしかに「感傷」（詠嘆）は詩歌の源泉であり詩人たるものの資質でもある。感傷の涸渇したところに詩歌はその生命を喪失するに違いない。但し「感傷」が一部の流行歌に見られる如く、浅薄な、俗情に媚びるような質のものであってはならない。内面的な深いところで感得される「哀しみ」「傷み」であるならば謂うところの「感傷」は言葉の表層的な意味での低さに堕ちず、真の抒情として高

められるに違いない。

宮野さんの作品が時に低い意味での「感傷」に隋ち入り時に、抒情が浅く流れて、作品の質を弱めてしまうのはころしななければならない。亦、主観、主情派の作者にあり勝ちな客観描写の不足による作品の具象性に欠ける憾みなしとしない。亦、観念が先行して素材としての言葉がむき出しになる場合も見受ける。これ等の指摘は、作者の今後の課題として克服すべき点である。

だが、宮野さんは資質に恵まれた短歌作者である。「旅程」の作品の成功した作品の幾つかが、それを実証する。この度の出版を機会に作者に尚一段の飛躍を望み亦期待するものである。

最後に「旅程」より印象に残った作品を紹介し、おおかたの諸賢の愛誦を希って止まない。

ひと言もまだ交わさねど朝毎に乙女はバラの垣根より出づ

狭霧わく切通しをばあへぎつゝ新聞配達の少女登り来

嫁ぎ来し君が始めて漬けし菜を鹵に冷やゝけく酒を味わう

身籠れる妻のいやがる大き蛾が秋寒き夜の窓に音立つ

泣き叫ぶ子の口中をのぞきこみ妻は確かむ虫歯なきこと

灯台の手すりに寄りて立てる子を仰ぎ見る妻よ案ずるなかれ

やがてくる冬のきざしかこの沼のさざなみ淋し岸に立ちけり

学校の帰りに栗拾い来し子を叱る妻の声やはらかし

月祭りの夕べを遅く帰り来て供へてありし柿食いにけり

一様に水は流れずゆるやかに流るる瀬ありて月蒼くさす

一九七七年六月二十日

河口 一紀

旅 程

漁 火

ひと言もまだ交はさねど朝毎に乙女はバ
ラの垣根より出づ

霧深くわずか残せる山麓に小梨かざして
少女消えゆく